2023 ズバリ！的中 古文

立教大学

『十訓抄』の本文が的中

入試問題

2月12日実施　文学部
三

三　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

河内の国、金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀（注1）を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて、飛びありく」といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふ。まことに食ひやおほせたりけむ、五穀のたぐひ、食ひのきて、(1)やうやう両三年になりにけるに、(2)げにも身も軽くなる心地しければ、弟子などにも、(3)「我は仙人になりなむとするなり」と、つねはいひて、「今々」とて、うちうちにて、(4)身を飛びならひけり。

「すでに飛びて、昇りなむ」といひて、坊（注2）もなにも弟子どもに分け譲りて、「昇りなば、仙衣（注3）を着るべし」とて、形のごとく腰に物をひとへ巻きて出で立つに、「わが身にはこれよりほかは、いるべきものなし」とて、(5)年ごろ、秘蔵して持ちたりける水瓶（注4）ばかりを腰につけて、すでに出でけり。

弟子、同朋、名残惜しみ悲しぶ。聞き及ぶ人、遠近、市のごとくに集まりて、「仙に昇る人、見む」とて、集ひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたる巌の上に登りぬ。(a)(6)「一度に空へ昇りなむと思へども、近くまづ遊びて、(7)ことのさま、人々に見せ奉らむ」とて、「かの巌の上より、下に生ひたりける松の枝に居て遊ばむ」とて、谷より生ひあがりたる松の上、四五丈ばかりありけるを、さげざまに飛ぶ。人々、目をすまし、あはれを浮べたるに、いかがしつらむ、心や臆したりけむ、かねて思ひしよりも、身重く、力浮き浮きとして弱りにければ、飛びはづして、谷へ落ち入りぬ。

人々、(8)あさましく見れども、「これほどのことなれば、(9)やうあらむ。さだめて飛びあがらむずらむ」と見るほどに、谷の底の巌にあたりて、水瓶もわれ、またわが身も散々打ち損じて、ただ死にしたれば、弟子、眷属（注5）、さわぎ寄りて、「いかに」と問へど、(d)いらへもせず。わづかに息のかよふばかりなりけれど、とかうして、坊へかき入れつ。ここに集まれる人、笑ひののしりて帰り散りぬ。

さて、この僧、あるにもあらぬやうにて病み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥づかしながら(e)あつか

河合塾

直前講習
青山・立教・学習院大国語テスト
第2講　C

C　次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

河内の国、金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく」といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふ。A まことに食ひやおほせたりけむ、五穀のたぐひ B 食ひのきてやうやう三年になりにけるに、［ア］身も軽くなる心地しければ、弟子などにも「我は C 仙人になりなむとするなり」と常はいひて、「今々」とて、うちうちにて身を飛びならひけり。「すでに飛びて登りなむ」といひて、坊も何も弟子どもに分け D ゆづりて、「登りなば、仙衣を着るべし」とて、形の如く腰に物をひとへ巻きて出で立つに、「我が身には、これよりほかはいるべき物なし」とて、年ごろ秘蔵して持ちたりける水瓶ばかりを腰につけて、すでに出でにけり。弟子、同朋、名残を惜しみ悲しぶ。聞き及ぶ人、「仙に登る人見む」とて、E 集ひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたる巌の上に登りぬ。「一度に空へ登りなむと思へども、近く［イ］遊びて、ことのさま人々に見せ奉らむ」とて、「かの巌の上より、下に F 生ひたりける松の枝に居て遊ばむ」とて、谷より生ひあがりたる松の上、四五丈ばかりありけるを、下げざまに飛ぶ。人々、目をすまし、G あはれを浮かべたるに、H いかがしつらむ、心や臆したりけむ、［ウ］思ひしよりも身重く、

力うきうきとして弱りにければ、飛びはづして谷へ落ち入りぬ。人々、I あさましく見れども、「これほどのことなれば、やうあらむ。［エ］飛びあがらむずらむ」と見るほどに、谷の底の巌にあたりて、水瓶も割れ、また我が身も散々うち J そんじたれば、弟子、眷属(けぞく)さわぎ寄りて「いかに」と問へど、いらへもせず。K 僅かに息のかよふばかりなりけれど、L とかうして坊へかき入れつ。ここにあつまれる人、笑ひののしりて帰り散りぬ。

さて、この僧、M あるにもあらぬやうにて病み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふあひだ、年ごろいみじく食ひのきたる五穀をもていたはりやしなへば、命ばかりは生けれども、足手腰もうち折れて、起居(おきゐ)もえせず。今はもとの如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゆしくゆづりたりし坊も宝も取り返して、かがまり居たり。

（『十訓抄』による）

ふあひだ、松の葉ばかりにては、命生くべくも見えねば(b)、年ごろ、いみじく食ひのきたる五穀をもて、さまざまいたはりやしなへば、命ばかりは生きけれども、足手腰もうち折れて、起居(おきゐ)もえせず。今は松の葉、食ふにも及ばず。もとのごとく五穀むさぼり食ひて、弟子どもに(10)ゆゆしく譲りたりし坊も宝も取り返して、かがまり居たり。

仙道に至る人、たやすからぬこと(c)なり。ただ松の葉を食ひならひたるばかりにて、深き谷へ向ひて飛びける［　　］、よく思ひはかりなけれ。

（『十訓抄』による）

（注）
1 五穀――五種の主要な穀物類。
2 坊――寺の建物。
3 仙衣――仙人の衣。
4 水瓶――飲料水などを入れる容器。
5 眷属――従者。配下の者。

河合塾